

争論 インターネットはどんな「つながり」を紡ぐのか？

ネットが深めた「つながり」の問題と今後への期待

土井 隆義

筑波大学人文社会学系教授

聞き手：加賀美太記（就実大学講師）



社会の変化と「つながり」への依存

【加賀美】 土井先生は社会学の視角から、現代の人間関係について研究されています。まずは現代の人間関係の特徴についてお聞きしたいと思います。

【土井】 日本社会では、社会の流動性が高まっているといわれています。このことがクローズアップされ始めたのは、おそらく2000年以降、小泉内閣の頃からだと思います。いわゆる新自由主義が明確に打ち出され、雇用の流動化を典型に、社会組織の流動性が高まったといわれています。

ただし、日本における最初の新自由主義は、中曽根内閣の頃ですから、実際には1980年代ぐらいから始まっていたのだらうと思っています。この80年代の流動性の高まりと、2000年を超えてからのさらに加速した傾向とは、社会背景が大きく違っています。中曽根内閣のときにはまだ経済成長の安定成長期でした。つまり、社会のパイが膨らんでいる時代だったのです。

社会のパイが膨らんでいるときに社会の流動性が高まると、まだフロンティアは広がっていると感じられやすいので、人はチャンスを活かすために打って出ようとし、チャンスを活かすためには、個性や才能が大切だと考えます。中曽根内閣の

ときの臨教審答申では、日本の教育は大きく方向転換し、個性化教育へと舵を切りました。社会、とくに学校はそうですが、「個性が大切だ」と盛んにいわれ、子どもたちや若者たちもそのように思えた時代でした。

ところが、バブル崩壊以降、日本社会はゼロ成長期に入ります。社会のパイが膨らんでいない、場合によってはしぼんでいるとすら感じる。そういうときに、さらに社会の流動性が高まると、人はどう反応するか。フロンティアが見えない、閉じた世界のなかで流動性が高まると、日本はまだそれなりに豊かな社会ですから、人はいまのポジションを守ろうとします。

ポジションを守るために大切なのは、個性や才能ではありません。そういうものを出してしまっただけでは、自分だけが浮いてしまう。だから、むしろそれらを抑えて、人間関係を重視して、関係から自分だけが外されまいとする。そうすることによって、いまの自分のポジション、生活を守ろうとする。そういう傾向が強まると、人間関係に対する過剰な思い入れが生まれます。それが「つながり」への過度な依存を生みだしているのではないかと考えています。

現代の子どもたちの「つながり」

さらに、「つながり」への依存は社会全体の傾向ですが、若者を含めた子どもたち

の場合の舞台は、社会の組織のひとつである学校、あるいは大学です。そして、そこも社会の動きとは無縁ではありません。実際に学校の組織にもいろいろな変化が生じています。

たとえば、特別支援学級です。特別支援学級は戦後ずっと増えてきて、1970年代にいったん頭打ちになり、その後はずっと横ばいでした。再び増え始めるのは、90年代後半です。実際に特別支援学級に在籍している児童・生徒の数は、70年代までぐっと増えてきて、そこでいったんピークを迎えた後、減り続けていきますが、90年代に入ってから反転して、また増え始めます。人間の生物学的特徴がこれほど極端に変わるはずがないので、これは明らかに社会制度に影響された結果、つまり捉えられ方の違いだと思います。

70年代に増えていた多くの特別支援学級（当時は特殊学級）に通っていた子どもは、どちらかといえば学習に困難を抱えた、つまり知的な問題を抱えたお子さんでした。もちろん、いまの特別支援学級にもそういうお子さんはいますが、いま増えていると言われているのは、「発達障害」という言葉に象徴される、人間関係がうまくいかない、クラスになかなかなじめない、居場所がないお子さんです。そういうお子さんが生きづらさを抱えて特別支援学級につながっていく、というケースが増えています。

発達障害のような症状を抱えていて、人の心を読むのが不得手なお子さんは、昔もいたはずですが、そういうお子さんが、いましんどくなってきたのは、組織の流動性が高まってきたからだだと思います。

平たくいうと、クラス、班、部活といった仕組みによって人間関係が拘束されていた時代は、それによって人間関係が決まるので、そんなに相手の心を読む必要はあり

ませんでした。しかし、いまはその流動性が高まってきているので、お互いに相手の心を読み合わない、関係をつなげていくのが非常に難しい。

たとえば、班分けのとき、われわれの時代は単純かつ否応なく出席番号順に班分けされました。強制的にどこかの班に入るわけですから、不本意な相手ともつながらざるを得ませんが、その代わりに自分だけが外されるリスクもなかったわけです。

ところが、いまは「自分と気の合う仲間と班をつくりなさい」といわれる。そうすると、自由度が高まって満足のいく人間関係はつくられやすいのですが、その裏返しとして、自分だけが関係から外されるかもしれないというリスクも高まります。それを避けるためには、お互いに相手の心をモニタリングしなければいけない。

この「相手の心をモニタリングしないといけない」ということが、おそらく発達障害のような症状を抱えたお子さんにとっては非常に困難なことであって、だから学校が生きづらいところになっている、という面があると思います。

お互いに相手の心をモニタリングしないと関係を紡いでいけないというのは、もちろん一般社会も同じですが、一般社会よりも学校のほうがきついと思います。社会の場合は、流動性が高まっても明確な境界線がないので、外部があります。しかし、学校の場合は、いくら流動性が高まっているとはいえ、枠は崩れていない。学校という枠は保持されながら、クラス、班、部活といった組織の境目が揺らいでいるわけです。枠が崩れていないわけですから、人的資源には限りがあります。そうしたなかで流動性が高まるわけですから、人的資源のゼロサム的な奪い合いが生じやすく、目にも見えやすい。だからこそ、一般社会よりも学

校のような組織のほうが、人間関係を過剰に気にしないといけない。いま、そういう状況が生まれていて、それが子どもたちの「つながり依存」「つながり過剰」のような問題として現れているのではないかと考えています。

ネットとモバイル機器による「軽やか」だけど「しんどい」つながり

【加賀美】 枠が明確な学校という閉じた空間で、しかも人間関係の制約が多い子どもたちのところに、社会の傾向が端的に現れているということでしょうか。

【土井】 そうですね。それに輪をかけたのがインターネットとモバイル機器の普及です。2001年には携帯電話の所持率が50%を超え、急速にネットも広まりました。それまでネットというのは、マニアックな子どもたちだけが接するものでしたが、誰もが使う、日常生活のインフラになってしまいました。そうすると、リアルな世界とネットの世界は別のものでなくなり、むしろネットはリアルな世界をマネジメントするためのインフラとして機能するようになります。いままでは、子どもも大人も、リアルな人間関係をマネジメントするツールとしてネットを駆使しています。

基本的に、ネットは組織や制度という枠組みを超えてつながることを可能にしやすいので、学校でいえばクラスや部活といった組織にとらわれない人間関係がつけられやすく、それによってますます流動性が高まります。

しかも、ネットでは教員の目が届きにくい空間で、複数のチャンネルで同時並行してつながることも出来ます。だから、面

と向かってはにこやかにしゃべりながら、LINEでは悪口を書き込むとか、複数のチャンネルが同時並行するので、いったいどっちが本音なのだろうか、と疑心暗鬼になりやすく、過剰にお互いを気にしないといけない。ネットによってそういう状況が加速しているように思いますね。

【加賀美】 振り返ってみると、2000年代以降、ネットに関わるサービスや技術は進歩してきました。たとえば、メール、ブログ・掲示板、LINEやツイッター等があって、少しずつ性格が違いますし、普及の時期や度合いも異なりますが、そうした違いはつながりにどのような影響を及ぼしているのでしょうか。

【土井】 SNSが登場する以前、ネットは匿名の世界でした。リアルな世界とは断絶があったので、一種の逃げ場所でもありました。リアルな世界で生きづらさを抱えた人たちが、自分の本音を吐露したり、自分の思いをweb日記に綴ったりと、そういうことができた時代です。

ところが、web日記がブログになり、さらにSNSになっていくにつれて、限りなくリアルな実名の世界に近づいてきました。もちろん、多くの若い人はリアルな実名とは切り離れた、いわゆる「裏アカ（裏アカウント）」を持っていて、上手に使い分けたりしていますが、主には日々のリアルな人間関係のマネジメントのためにネットを使わざるを得ない状況です。その意味で、ネット上のつながりはかつてのような逃げ場所ではなくなっているという感じがします。

【加賀美】 日々の人間関係のマネジメントという意味では、ネットに日常的につなが

ることを可能にした携帯電話のようなモバイル機器の影響も大きいですね。

【土井】 そう思います。携帯電話のようなモバイル機器は便利で、人間関係の流動性と自由度を高めますが、だからこそ、つながりのしんどさを助長する面もあるのだらうと思います。

ちなみに、ネットを介した人間関係について、上の世代はよく希薄化しているといいますが、私はむしろ、若者のつながり方、コミュニケーションのモードが変わってきているのだらうと思います。

人間関係が組織や制度によってある程度固定されていた時代には、私たちは好き嫌いに関わらず、否応なく相手と全面的に全人格的に付き合わざるを得なかった。しかし、流動性が高まってきて、ネットのアカウントのように、局面ごとに付き合う相手を切り換えていける状況になると、相手と付き合うときに、相手をトータルに理解する必要はありません。その局面で必要な情報だけで、十分に相手と濃密な関係を築ける。若い人たちはそう感じているのだと思います。

ですから、若い人たちには人間関係が希薄化しているという実感はないと思いますよ。いま必要としている状況においては非常に濃密につながっていて、それ以外の情報については「だって、この場面では必要ないでしょ？」ということになっているのだと思います。そういった一点集中型に変わったつながり方のモードが、上の世代にとっては希薄化しているように見えてしまうのではないかと思います。

しかし、この局面ごとに切り換えていくつながりは、軽やかで、自由で、非常に心地よいものではあるのだけれども、いったんヒビが入ると、その局面でしかつながっ

ていないので、容易に破綻しかねない関係でもあります。そのため、破綻させないように、お互いの気遣いがどんどん過剰になっていき、しんどさが増していきます。つまり、以前の全人格的なつきあい方のしんどさとは中身が違う、いつもお互いに相手の意向を読み取っていないといけないというしんどさが、現代のつながりには潜んでいるのだと思います。

【加賀美】 ネットが生んだ、若者にみられる新しいつながり方には良い面もあるけれど、以前とは別のかたちでしんどい面があるわけですね。

【土井】 はい。ただ、ネットによって人間関係が変わった面もありますが、しょせんネットは道具なので、使う人間のメンタリティの部分大きいですね。考えてみれば、ネットがこういうかたちで進化・発展してきたのは、もちろん技術的なイノベーションもあると思いますが、同時に、それを求める現代人のニーズがあったからです。現代人のニーズを汲み取るかたちで技術は発展してきているので、私たちが人間関係に過剰な思い入れをするようになったからこそ、いまネットがこういうかたちで発展してきたのだということを忘れてはいけないと思います。

もちろん、技術の発達に関係の不安を煽っている面もありますが、それを完全に技術還元論にしてしまうのは少し違和感があります。やはり技術の発達方向を決めるのは人間のメンタリティなので、そういうつながりを現代人が求めているという面があって、こういうかたちでネットが発達してきたのだと、私は思います。

【加賀美】 ネットが変えたと思われている

つながりも、その背景には、従来のつながりとは異なる新しいつながりを望む現代人の意識変化があったわけですね。

【土井】 そうです。そして、結局のところ、そこにはそれまでと異なるしんどさがあった。そういうときに地域的なつながりの良さを発見しつつある若者もいます。だからこそ、いまよくいわれるような「地元志向」の若者が増えてきているのだと思います。地域的なつながりは、自分が自由意思で選んだ人間関係ではないがゆえに、ある種の安定感があるからです。若者は、ある程度の安定感のある関係性のなかで、もう一度、自分自身を見つめ直すようなところに魅力を感じていると思います。だから、自分が安心できる場所、安定できる場所として、たとえば幼なじみのような関係が再評価されているわけです。

非常に象徴的な例を挙げれば、いま専門職の消防職員は増えていますが、消防団員数は減っています。ところが唯一、大学生の消防団員数は増えている。それは、やはり地元のつながりに対する憧れの現れではないかと思います。

たしかに大学生は、われわれの時代であれば、中学校・高校・大学と上がってくるなかで、それまでの友だちとの関係が切れていきました。私は山口県出身なので、とくに高校を卒業して地方から東京へ出るなかで、地元の間人間関係はほぼ切れました。同じように東京へ出てくる仲間がいますので、高校の仲間とはつながっていますが、中学校の友だちとは上京の際にほとんど切れたのです。

以前はそうやってライフステージが変わるごとに、人間関係も入れ代わったものですが、いまはつながり続けています。学生を見ていても、「今度の週末に中学校のと

きの同級生と遊ぶんだ」という話をよくしています。その友だちは中卒で働いているようですが、そういう子と大学に進んだ子が、ライフステージが進んだ後もつながっているということは、昔では考えられなかったことです。

技術的にはネットの発達と普及のおかげなのですが、逆にネットが形成する流動性の高いつながりと違って、若い頃をともにした仲間であるからこそ、ある種の安心感があるのだと思います。そういうつながりを一方では求めたい、という傾向が進んでいると思います。

ただ、これは従来の地域的なつながりとは少し異なります。従来の地域的で全人格的なつながりの「地元」は重たい感じがしますが、社会学者の鈴木謙介さんが言うところのカタカナの「ジモト」のような、地域的なんだけど、わりと軽やかにつながっていける関係性なのです。

異質な他者とのつながりは 創発性を生む

【加賀美】 つながり方という際には、若者の関心事である、いわゆるコミュニケーション能力も関わってくると思いますが、この点では何か変化が起きているのでしょうか。

【土井】 コミュニケーション能力はしばしば誤解されていて、個人に内在する個人の力量のように思われていますが、じつは関係の関数です。相手との関係次第なのです。たとえば、会話が盛り上がる相手もいれば、盛り上がらない相手もいるわけで、どういう相手と接するかによって、コミュニケーション能力の高さは変わるのです。

狭く閉じた世界のなかだと、同じような方向を向いているので、コミュニケーショ

ン能力のみがクローズアップされてしまいがちです。しかし、異質な他者とつながる広く開いた世界では、そこで伝えるもの、折衝しないとイケないものがたくさんある。そこでは、当然、コミュニケーションが重要になるので、その能力は求められます。でも、それは、いま学校などで子どもたちが意識しているコミュニケーション能力とは違うものです。

学校内で子どもたちが意識しているコミュニケーション能力は、いわば同質的な関係のなかで相手の意向を読み取り、場を盛り上げていけるような能力（空気を察する能力）だと思いますが、異質な他者とつながっていくときには、そもそも空気を察しようがない。そういうときにどうやってお互いの意思を提示しあい、折衝していくか。これが社会に出てから求められるコミュニケーション能力ですが、学校内にいるとそこが見えなくて、しばしば錯覚されがちなのです。

【加賀美】 確かに、「空気を読んで」、集団のなかでなるべく浮かないようにして過ごす雰囲気の子は少なくない印象です。

【土井】 その通りで、最近の学生は目立つことを嫌うので、よく「日本の将来は大丈夫か」といわれます。ただ、逆にいえば、グループのなかでお互いに空気を読み合っただけで回していくことは得意なので、グループで創発性を発揮するのはけっこう得意ともいえます。

ネットの場合だと、動画投稿サイトであるニコニコ動画のボーカロイドなどはその典型だと思います。歌詞を書く人、曲を作る人、アニメを描く人が、みんなバラバラで、フェイストゥフェイスではつながっていない。でも、ネットのなかでつながって、

共同で多くの人に共感される作品を創っていく。そういう能力には長けていると思います。共同で創発性を発揮する力は、しっかり若い人にあるのです。

ただ、注意すべきは、創発性が発揮されるのは、異質な人がつながっている場合だということです。先程の事例にしても、ボーカロイドへの関心や創作という同質性はあるにしても、曲を作るのが得意な子と、アニメをつくるのが得意な子は、また別の特徴を持っていて、だからこそお互いにリスペクトし合えるわけです。異質どころがうまく化合し合って創発性が生まれるのであって、ただ同質な人だけがいくら集まってもだめですね。

理想をいえば、ネットは時間と空間の制約を超えて、異質で多様な人間をつなぐ道具なので、そっちに軸が振れてほしいと思っています。ネットが登場した頃は、そっちに軸が移るかと思いましたが、現実はそのならず、時間と空間の制約を超えて、同質な人間同士がつながり合うことになってしまいました。

その結果として、たとえば、似通った意見の人たちだけで交流することで、そのつながりのなかで同じ意見がやまびこのように響き渡り、意見の多様性を喪失してしまうエコーチェンバー、あるいは検索エンジンなどが個人にサービスを最適化することで、知らず知らずのうちに自分好みの情報だけに囲まれるようになってしまうフィルターバブルといわれるような、ネット独自の問題が生まれています。そのなかで、いわゆるフェイクニュースも広まりやすいという構図になっています。

この隘路を抜けるために、異質な他者と多様な人間が時間と空間の制約を超えてつながることができるという、ネットの特性を有効に活かせるような方向にもっていき

たいですね。現実には難しいことですが。

ジェネレーションギャップを乗り越える

【加賀美】 異質な他者といったときに、世代の違いというのは身近な例であり、割と大きな断絶のようにも思います。たとえば、インターネットを使える世代とまったく使わない世代が、うまく融合するのはけっこう大変なのではないかと思うのですが。

【土井】 そこはもう出会ってしまえば、お互いに刺激になると思いますね（笑）。だから、出会える場所をどうやってつくるかです。

なお、世代間の関係を考えるとき、いまの若い人にとって、世代間ギャップは以前よりも小さくなっています。われわれの若い頃は、上の世代は鬱陶しい存在だったと思います。いまはほぼそういう感覚はないのです。日本能率協会の調査を見ても、かつての新入社員、つまり、いまの上司は、ある程度の距離を持って、遠くから見守ってくれる上司が理想的だと考える人たちが最も多い。しかし、いまの新入社員の側はそう思っていないで、むしろ身近にいて、懇切丁寧に指導してくれる上司が理想的だと思っています。

上の人は「あんまり言っても鬱陶しいかな」と思って、プレーキをかけてしまいがちですが、決してそんなことはない。若い人は、上の世代にちゃんと関わってほしいと思っている。そこがわかると、もう少し口出しもできるかなと思います。つまり、今のつながりにおいては、上の世代からはちょっとおせっかいなぐらいのほうがいい。それが下の世代からすると、意外に心地よかったりする、というのが現在の状況

です。その点についてのジェネレーションギャップは逆にあると思います。

【加賀美】 そうしたギャップの有無は、いつ頃から変わってきたのですか。

【土井】 人間関係に対する考え方が変わってきたのは、20代の調査で90年代後半から2000年代ですから、80年代生まれの世代ということになりますかね。

【加賀美】 ちょうど私たちが境目ですね。それは、最初におっしゃられた社会背景の変化が大きいのでしょうか。

【土井】 そうですね。社会が成長していたときには、どうしても世代間ギャップが生まれます。社会が成長していれば、上の世代が育ってきた社会状況と、下の世代の社会状況は違うものになり、そこに世代間ギャップが生まれるのです。しかし、社会の成長が止まれば、上の世代も下の世代も同じ状況で生きようになるので、当然、そこで価値観のギャップも生まれません。

そうしたギャップの消失が目に見えだしたのは90年代に入ってからです。NHK放送文化研究所の調査結果を見ても、80年代の中高生の親子間には価値観の大きなギャップがありましたが、2000年代の親子にはギャップがほとんどありません。この親たちは80年代に思春期を過ごした人たちです。

もちろん、社会の変化はあって、ネットは2000年に入ってから大きく変化したので、親御さんの世代と子どもたちの世代間のギャップは、ネットについてだけ大きく膨らみました。でも、それ以外の一般的な生活態度に関わるものはほとんどギャップがなくなっています。それは社会の成長が止まったからなのです。

生協という「つながり」の可能性

【加賀美】 これまでネットの普及や社会変化の中で、つながり方に変化が生じてきたことをお話いただきましたが、生協などの協同組合にはこうした時代の中でどのような可能性があるとお考えでしょうか。

【土井】 生協のつながりは、生協を利用しているという点では共通性があるけれども、それ以外では基本的に異質なものをもち、さらに地域を拠点にしています。つまり、共通点をフックにしつつ、その後に異質な世界が広がっていることを自由に体験できるという特性があると思います。

また、生協のつながりは「共同購入はやめた」と言えば、それで終わってしまうのも事実ですので、つながりを維持するためには、異質な面でお互いに交流し合っていないといけない。そこで関係ができていれば、「少し付き合いもあるし、やめるの、よそうか」とか「最近、あまり利用しないけど、でも、ちょっとやめづらいよね。人間関係があるからね」となります(笑)。

このように、全人格的な付き合いとなる地縁的なものや、局面的な付き合いとなる趣味縁との中間になる、若者にとっての「ジモト」のような、割と軽やかなつながりになりうるのが生協かなと思います。完全な趣味の世界でもないし、完全な地域のつながりでもない。そういう中間の橋渡しをしてくれるような位置づけです。

地域社会からは逃れようがありませんが、生協に入るかどうかは自由ですから、その意味では趣味に近い面がある。でも、つながっているのは地域なので、完全な趣味縁とも違う。否応なく組み込まれる完全な地域社会と、完全に自由選択の趣味縁と

の中間に位置しているのです、そのメリットをうまく活かして、2つをつなげていく触媒になることができれば、いいですね。

そして、たぶん、そういうことが好きな若い人は少なくありません。彼らはボランティアも好きだし、NPO など、いろいろなことに関わりたいと思っている。そうすることで、自分の居場所を見つけ、自分の自己実現の場所を見つけたいという若者が増えてきている。そういうニーズは若い人にあるのだから、まずは生協の利用というところで関係性を築き、そこから生協がうまく若者のニーズを汲み取って欲しいと思いますね。

また、地域の活性化等を考えたとき、これまでの地縁的なものはだいたい弱まっていますが、それでもネットを通じて、何とか地域を盛り立てようという動きも出ています。ただ、実際に動くとなった際、地域に残っているつながりは何かというと、そのひとつが生協の共同購入なのです。それは今では貴重な地縁的なつながりなんですね。生協のつながりとネットのつながりは、似た面と違う面があると思うので、違う面をどのように活かせるかが大きいですね。それが地域の活性化にもつながっていくのではないのでしょうか。

【加賀美】 生協のつながりを、どう現代的にアレンジして残していくかが大事になるし、地縁的にも重要な課題であるということですね。本日はどうもありがとうございました。